2024(令和6)年度　法人本部　事業計画

全体として

中長期計画がスタートしてから 2 年目にあたる R5 であったが、見直しを行いながら再実施の方向性を探る一年となった。試みとしては施設長会や拡大経営で現4事業の方向性を話し合い、3ヵ年の計画作成に取り組み、各事業とも実際の計画を立て再実施への準備をした。

さらに、人事的には職員の年度途中の退職が続いた年度でもあり、各現場の協力をもらいながら助っ人の調整や半期での人事異動を行うなど、各事業を成り立たせるために労力を費やした。

それを受けての R6 は、法人本部として中長期計画の方向性や再実施に向けてさらに議論を重ね、準備に時間をかけ取り組んでいきたい。

しかし一方で、労働基準法の改正やインボイス制度の開始など国の動きに合わせた対応も必要となり、その業務にも追われ、その対応に終始せざるを得ないのが現実でもある。

最後になるがこの様な状況の中でも、地域貢献として位置付けている食を通した取り組み(こども食堂や学習支援などへの関わり)や、当事者活動へのサポート(ふらった一新聞の発行や講演会への講師参加)などは順調で着実に広がりを見せている。

重点目標　【職員を大切にし、元気で働きやすい組織を目指す】

＊中期計画の見直しと再実施の継続
（本部と 4 事業の整合性つけて法人として一つの計画にしていく）
＊職員の育成 （複数面談体制の拡大等）
＊職員の採用 （常勤･非常勤各 1 名）
＊雇用管理への取組みの継続 （職員処遇･資金計画の策定）

Ⅰ組織運営

A 理事会･評議員会

役員体制‥通常通り 5 月･11 月･3 月理事会を 6 月に評議員会を開催予定。

懇談会‥理事会、評議員会とも上記会議以外に開催を予定。

B 事務局

通常業務‥(会計入力、ピアス実績入力等)の正確性と安定した事務処理の継続。

事務局会議‥月 1 回の定期開催で情報共有。

事務局通信‥各事業所への情報の発信と共有。

その他…梅林税理士事務所にアドバイスをいただきながらのより正確な会計処理。

C 情報発信

HP‥前期リニューアル予定。

賛助会通信‥2 回の発行予定。

D 地域(社会)貢献

◆食を通じた貢献‥

＊おいしい時間(第 1 水曜日)

＊ラボくにスタ(第 3 水曜日)

＊国立市社会福祉協議会学習支援(毎週月・木曜日)

＊銀風工房(市内の学習支援・フードパントリー活動団体・第1・3 金曜日)

＊パワーアップ塾(学習支援・子供の居場所・毎週月～木曜日)

＊国立市社会福祉協議会リングリンク(市内のご家庭への弁当配達・毎週木曜日)

◆当事者発信

＊ふらった一新聞‥引きこもり等生きづらさを抱えた方達への新聞発行。年 4 回を予定。

＊世田谷ピアサポート事業‥フローアップ研修への講師参加。

E 渉外

【国立市】障害区分認定審査会、自立支援協議会、社会福祉協議会評議員、社会福祉法人連絡協議会、社会福祉協議会まごころプラン推進・評価委員会、櫻の杜ハウス運営委員会

【その他】白梅会理事、はらからの家福祉会評議員、えりじあ福祉会第三者委員、かいゆう第三者委員(兼虐待防止委員会参加)、電気神奈川福祉センター評議員、厚生労働省「障害に対する差別禁止・合理的配慮に係るノウハウ普及・相談支援事業に係る提案書技術審査」委員、東京都自立支援協議会、東大和市自立支援協議会就労部会、調布市こころの健康センター運営委員、厚生労働省「就業支援担当者の育成に係る研修カリキュラム作成作業部会」委員、高障求(JEED)「就労支援実務者の専門性と支援力に資する知識スキルに関する研究」有識者委員、東京都障害者雇用優良取組企業 選定委員

F リスクマネジメント

◆防災‥プロジェクトを中心に、防災訓練・職員研修(BCP 含む)・連絡訓練・AED 及び救命講習等を実施予定。併せて今年度より感染症対策として訓練及び研修を行なう予定。

◆苦情解決‥例年開催している苦情・虐待につながるような事例の報告検討会に加えて、担当者が主体的に研修を企画・運営する予定。

Ⅱ組織管理

A 人材育成‥佐々木氏による研修は継続予定。また昨年度実施して好評であった職員のメンタルヘルス研修を予定。その他、階層別研修も検討している。

B 雇用管理‥労働基準法の改正に基づく具体的な対応への継続。職員処遇についての見直しの検討をしていく予定。

令和６年度 ピアス（就労移行・生活訓練・定着支援）事業計画

基礎データ（移行・自立訓練）　2024 年２月末現在

		2023 年度	2022 年度	2021 年度	2020 年度
見学者数		33	56	29	48
入所者数	移行（18） （内生→移）（6） （リワーク）	14 5 2	18 8	11 6	12 5
	生訓（18） （内移→生） （リワーク）	15 2	12 1 1	11 0 1	11 1 2
平均請求人数 月	移行	20.5	21.8	17.2	19.1
	生訓	14.1	15.8	12.2	11.7
一日平均利用人数（利用率）	移行（18 人 90%）	15.4（76.9%）	16.6（83%）	14.1（70.5%）	15.4（77%）
	生訓	8.9（44.4%）	9.0（45%）	7.5（37.5%）	7.1（35.5%）
就職者数（上５、下５）		8	12	4	10

総論

上半期、一部メンバーの感情的なふるまいへの対応に緊張感が漂っていたが、一方ではピアスらしいメンバー中心のグループ活動が再開されて活発な雰囲気も盛り上がっていた。それを受け継ぎ、下半期はメンバーと地域の活動に参加が出来たことは、長らく内向きだった私達の視点を外に向けさせる機会になった。食に限らず地域とのつながりを大切することで、私達が得られるものは多いと考えている。

自立訓練（生活訓練）事業を立ち上げて 10 年が経とうとする今年度。この事業の変遷や効果の振り返りをしつつ、自分達の取り組みを外部発信することを目標に挙げてきた。ピアスの就労支援を多くの人に知ってもらえるよう、11 月に行われた職業リハビリテーション実践報告会に参加をした。

年度途中に異動や退職者があったことで、タイトなスタッフ体制が日常的に続いている。この間、様々な場面でオープナーに助けられながら乗り越えている。トレーニングではメンバーの刺激になったりもしているが、楽観視せず限られた体制のなかで優先順位を確認しながら就労支援の質は落とさないよう努めたい。

令和６年度　事業計画

より多くの人にピアスを利用してもらう

【安定運営（経営）】就労移行・就労定着・生活訓練

① 就職者/上・下半期とも５名・合計 10 名、半年離職者０
② 新規入所/両事業合わせて月３名（移行 12 名、生訓→移行６名、生訓 18 名）、定着支援事業へのスムーズな利用開始へ
③ 区市町村就労支援センターを中心としたつながりをひろげる
④ 移行の１日平均利用者数 18 名、定着支援の１ヶ月利用者数 20 名
⑤ 職場実習/年間 10 名以上

○移行の機能を中心に検証し、改善へとつなげる

【就労支援の質（サービス）】

＜就労移行・定着支援＞

① 両事業の一体的サービスが移行に与えている影響（主にトレーニング）を検証し、改善へとつなげる
② １年ケース検討の充実（全員に実施、チームで把握）
③ ケース複数体制での取組み（節目ごと）により抱え込まない、複数の目でより良い質を目指す
④ 外部からの学び、外部とのつながりの機会をより増やす
・選択支援事業にどう取り組むか・より幅の広い層の受入れに対応できるように
・常に外向きの視点を取り入れる
⑤ 質の共有や相談・連携の機会を増やし、事業の意義を整理する【定着支援】

＜生活訓練＞　「安心の場であり、かつ就労を目指せる生活訓練」をめざす

① グループ性を高めていく活動の充実を行うことにより、集団やその中の活動・コミュニケーションの機会を増やす
② 安心して利用する・移行の部門体験の質をより良いものにしていくために、移行との情報共有の工夫を進めていく
③ 移行への移籍の目安を検討することで、生活訓練の機能を明確にしていく

令和６年度　なびぃ　事業計画

総論

１年間を通じて、日常の支援を取り戻すことを優先課題として取り組んできた。中でも地活は「コロナ禍対応」で影響を受けた飲食をいち早く解禁し、人と接するプログラムを行い、活動しやすいようにフリースペースの模様替えをした。その結果前年度よりも多くのメンバーが利用し、年度後半は新しいプログラムが定着した。また、相談から地活プログラムを利用し、通所の事業所を紹介するという支援の流れも回復してきた。

新規の相談が前年度より数が伸びている。相談内容は多岐にわたり、深刻な背景や課題を抱えた方々の支援に苦慮している。特に信頼関係の構築が難しい方の意思決定支援については、関係機関との連携支援行う必要があるため、相談の力量やコーディネートのスキルも早急に付けていかなければならないと考えている。一方、地域移行は３件動き出しているが、始まったばかり。丁寧かつ慎重を要するケースで、１クール（６か月）では間に合わないため、延長をしながら行う予定である。

支援と活動の質をあげていくために「地活」をテーマにした職員会議を増やしテコ入れした。結果「地活」に成果が現れた。しかし、実施日の職員体制や緊急の支援などの理由で確保できないことがあった。来年度は確実に行えるよう工夫が必要である。

くにたち地域では、くに精連が「にも包括」を意識した活動を昨年に引き続き行っている、今年度はなびぃのメンバーが第５商業高校での出前講座やピア活動で力を発揮している。また、計画相談事業所の連絡会議は復活。滝乃川学園の相談支援事業所“みなも“の研修をなびぃがコーディネートし合同開催した。今後、具体的なネットワーク構築が重要となる「にも包括」や「地域生活拠点」を意識し活動していきたい。さらに、２年間行わなかった自立支援協議会について国立市と事務局団体が協議を行い、再開に向けて話し合いを重ねた。他市から大きく遅れをとっている実情を重く捉え、なびぃが地域における責任と役割を果たしていきたい。

令和６年度　　事業計画	
なびぃ活動基本方針 『生活支援部門として支援力をつける』『地域連携を通した地域全体の福祉の質の向上を意識する』 相談支援の質の向上　　安心に配慮された場作り　　地域への意識	
＜重点＞にも包括・地域生活拠点・自立支援協議会を見据えたネットワークづくり 長期在院・社会的入院について地域移行支援を主軸にしながら取り組む	
国立市委託	自立支援協議会事務局として参画　くに精連本会及び準備会（実働部隊）として参画 →発信・提言・推進　市新体制との関係作り＋市内障害福祉ネットワーク構築への貢献
相談	『背景課題』への対応→情報収集＋知識獲得+ネットワーク構築
地活Ⅰ	他市援護者の地活利用の可能性の追求
計画	モニタ請求件数を増やすための工夫の検討
地移定	くに精連参画を通して対象者を把握し、地域移行支援へつなげる
自生援	対象となるケースの精査とそれに基づいた迅速な導入
他	講座　地域の支援者を巻き込んだ研修の開催　１回/年　生活支援部門事例検討　２回/年

令和６年度　棕櫚亭Ⅰ事業計画

【基礎データ】

登録者数	41名　/平均年齢　47.1歳					R4（36名）/46.2歳
内　訳	国立市内（38）　市外（3）					市内(32)/市外（4）
性　別	男性（24）　女性（17）					男(22)/女(14)
新規入所者	９名					７名
見学者	12名					20名
（紹介者）	市（2）	なびい（7）	GH(1)	ピアス（1）	家族（1）	
実習者	10名					９名
退所者	４名					３名

総論

今年度４月より午前の利用も含めて「いつ来ても、いつ帰っても良い」ルールを導入。一日の平均利用者数は9.2名と増加。日々の昼食作りでは13名程度を目安に準備をしている。

後期の人事異動で新しい体制になり、チーム作りやグループワークの役割分担等、手探りしながら行っている途中。

今年度入所した９名のうち５名の方が引きこもり。４名はB型など他に活動場所がある方で、B型に入所したてや安定通所ができない等、Ⅰを保険的な意味合いで利用されている。

登録後の傾向としては、すぐに定期利用となる方は少なく、逡巡しながらの利用が殆どで2～4ヶ月かけて少しずつ人慣れ・場慣れしていく様子。

実習中の方も含め、絵画教室のみの利用を希望されている方が３名おり、新規の方に絵画人気は高い。

家族との関係や親の介護状況、Ⅰの中での人間関係などで利用の仕方が流動的に変わっていくため、それぞれのメンバーのニーズに合わせた作業やプログラムを引き続き考えていきたい。

２月に、あるメンバーより苦情があがり数日後には取り下げられたが、前期の体制が薄かった時期から積み重なっていた悩みがあり、自分の苦しさを理解してもらえなかったという訴えであった。

ご本人の希望にプラスして面談や電話相談など行ってきたつもりであったため、支援の難しさを実感している。今後はクレーム等が出た時にはご本人の訴えがどこにあるのか丁寧に話しを聞く事と、苦情として挙がった時に担当者がきちんと聞き取れるよう項目を整理した対応マニュアルを作成する予定。

Ⅰに新たに入所してくるメンバーは長い期間家族以外とのコミュニケーションをとっていない方が多く、自分からの声掛けなども苦手にしている方もいるため、職員だけでなくメンバー同士でも声かけをしてほしいこと。また、メンバー同士のやり取りで言葉の使い方から誤解を招き言い合いになってしまう場面などもあり、スタッフだけではなくメンバーも一緒に安心できる場作りをしてほしいこと。そのためにもみんなでアサーションを学んでいこうメンバーと話し合っている。

【令和６年度事業計画】

★メンバーへのていねいな対応や支援を心掛ける

○メンバーの様々なニーズやチャレンジに対応できるようチーム作りをしていく

⇒日々の共有の中でスタッフそれぞれの考えをすり合わせていくことやメンバーとの関わりについて振り返りを意識亭に行っていきたいと思う。

○それぞれのメンバーのトピックスを押さえ、必要に応じた支援に繋げられるよう意識していく

⇒毎月ごとに生活面やⅠでの様子などの振り返りをし、１年の流れが見えるよう作成していく。

○アサーションプログラムに取り組んでいく

令和６年度　オープナー事業計画

【参考データ】R6.2月末現在　(カッコ内　前年度同期実績)
○利用者数　　５１１名 うち、就業中３１８名
○新規電話相談者 １９１名 （１５４名）
→ 疾病別（診断書ベース）
発達３６名、統失３６名、気分障害３３名、知的１６名、身体７名、高次脳機能障害１名、アルコール１名
※電話相談のため、疾病を確認できない方も。
紹介元 本人５５名、HW３２名、職業センター４名、移行１８名、移行以外４０名、特支３名、大学４名
登録または継続相談 ２１名
○新規登録者　５１名 （４３名）
○就職者合計　３１名 （２６名） / 目標２７名 → うちピアス１０名
○職場実習者　４４名 （３７人） / 目標３８名 → うちピアス１１名
○退職者　２３名 （２３名）
※1年未満６名　※1-3年未満６名　※3-5年未満５名 ※5年以上６名

総論

年度目標であった、就職数・実習数等、数値目標は概ね12月末には達成できている。

新規相談件数は191件とコロナ禍以降（令和2年度100件→3年146件→4年175件）、上昇を続けている。相談者においては、準備性を問わず採用が決まった方や、ご自身で活動を始めてしまうなど伴走型の支援を好まない方もおり、関わり方や支援のタイミングなど難しさを感じている。障害別では、精神・発達はもとより、知的障害の相談が増加し16件となっている。紹介元も、従来に加え、教育系（大学・特別支援校・専門学校）、福祉（婦人施設・措置事業）系、行政機関等、新規機関が増えている。その中で繋がった大学とは学生向け研修を開催するなどつながりができた。これらのことより、多様性に対応できる、職員個々やチームの支援力向上が必要と考えている。①

広域支援の特徴から、住所地に特定されることなく繋がる方も増えており、いずれにしても、オープナーあるいはなかぽつの認知度が上がっていると感じる。日々の業務量は各段増していることもあり、業務効率化は進めていきたい。とはいえ、最前線に立つ職員の心身の負担の大きさから、効率化の中でも、コミュニケーション不足にならない工夫も必要と考えている。②

地域ネットワークという観点では、今年度は国立・小金井・三鷹・武蔵野・調布（2センター）・東大和の市就労支援センターと個別に大小イベントや学習会等を開催している。地域事情を把握するための他法人B型事業所訪問も複数回おこなっている。医療機関開拓も1件できており、次年度も見込みがたっている。例年行政等から受任している就労系学習会講師・委員も断らず受けている。併せて、都内なかぽつ6センターでの定例センター長会の開催のなかで、合同連絡会の開催や東京都への要望書提出ができた。つながりによる（地域）支援力アップや今後の地域の就労支援の在り方を考えるうえで細やかに引き続き活動を続けたい。③

働く当事者がご自身の体験談を語る第13回「当事者セミナー」は4年ぶりのリアル開催を国立市芸小ホールで行ない約160名の参加があった。国立市との共催イベント（後援：国立社協）で市民参加もあり「満足した」は85%と高く、93%が「障害者の就職のイメージができた」とのアンケート回答もあった。登壇者3名の生の声は、影響力が大きく、勇気をくれる。次年度も続けたい。3月中旬にオンデマンド版の公開を病院DCや地活等に向け行なう。④

その他、受託事業（2事業）も執行上概ね問題なく、次年度も継続受託する予定である。

令和6年度 事業計画

- オープナーのサービスの質の担保と職員の支援力向上①
- 職員体制（チーム力の維持）と役割分担の整理②
- ネットワーク構築と活用拡大・なかぽつとして、「地域に求められるセンター像」の模索③
- 当事者発信を応援していく④